

「祈りの本質」

(黙3:14～22)

挽地茂男

2018.10.21 日本基督教団千歳丘教会

わたしはそれほど頻繁ではありませんが、忘れ物をすることがあります。忘れると困る物はいくつかありますが、説教の原稿はなかなか大変です。今のように取りに帰ることの出来る距離に住んでいればいいのですが、大学のチャペルなどの説教を頼まれて、忘れても取りに帰れない場合は大変です。一度、自宅からファクスで原稿を送ってもらったことがあります。もっとたいへんなのが「鍵」です。建物のある場所まで行っても、鍵がないと中には入れません。一度クリスマスに有隣ホームに出かけるのに、まだ皆さんが後片付けで教会におられて、教会の戸締まりの必要がなかったものですから、うっかり鍵を持たずに出かけてしまっ、て、クリスマスが終わって帰ってきましたら、中には入れないということがありました。十時夫人に電話をして助けていただいたのですが、鍵がないということは決定的に困った状態に陥ってしまいます。

今日は、一日研修会に参考図書を使いますので、その第1章をできるだけ忠実に報告しておくことが、午後の議論にプラスになるかと思いましたので、そのようにさせていただきました。本をお持ちでない方もおられますので、要約・レジユメというか抜粋というか、少し参考にさせていただけるものをつくってまいりました。

I 「祈りの本質」

さてこの参考図書、O・ハレスビーの『祈りの世界』には鍵になる聖句があります。その聖句をきちんと押さえておかないと、祈りの世界には入れないと思われ、ます。その聖句は祈りの本質を示す御言葉で、ヨハネの黙示録3章20節の言葉



です。もう一度お読みします。

黙3:20 見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたし
の声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と
共に食事をし、彼もまた、わたしと

共に食事をするであろう。

この聖句を題材にした有名な絵がございます。ウィリアム・ホルマン・ハントという人が描いた「戸をたたくキリスト」という絵ですが〔皆さんのプリントの絵はハントの絵ではありません。ハントの絵が好きではないので〕、描かれているドアには取っ手〔ドアノブ〕がありません。取っ手は内側だけについていて、キリストは外側からただたたいているだけ、開けるのは内側にいる本人の意志次第という図になっています。

1. 祈りとは何か

ヨハネの黙示録3：20 この聖句を鍵の聖句にして、ハレスビーは① 祈るとは心を開いて主イエスをお迎えすることだ、と申します。② 私たちの祈りがイエスを動かす



のではなく、イエスがわたしたちを動かして祈らせてくださる、と考えるのです。祈りの考え方を逆転するような発想です。祈りは主イエスの働きかけ、主イエスがわたしたちの心のドアをノックするところから始まるというのです。いわば、祈りの〈コペルニクスの転回〉ともいうべき、発想の転換です。心を澄ますと、主イエスのノックする音が聞こえてきます。そして主イエスを心に迎え入れることによって、親しい交わりが育てられるというのです。③「食事をする」という言葉は、その親密な楽しい交わりを象徴しています。祈るということは、わたしたちの心の内に、あるいは、わたしたちの悩みのただ中に主イエスに入ってきていただくこと。そして、わたしたちの悩みの中で主イエスは力を発揮されるのです。

祈りは魂の呼吸 「祈りは魂の呼吸」だとよく言われます。わたしたちは生命を維持するために空気を呼吸しなければなりません。わたしたちの身体にとって、空気を呼吸することが必要なように、わたしたちの魂には、祈りという呼吸が必要です。① わたしたちの身体に必要な空気は、わたした

ちを四方から取り囲み、自然にわたしたちの内に入ってこようとしています。呼吸を止めることは、吸うよりもはるかに難しいのです。それほど呼吸はわたしたちにとって自然な営みなのです。② わたしたちの魂の生命に必要な主イエスは、どこでもわたしたちを自然に囲んでいる空気のように、わたしたちが心を開きさえすれば入ってこられるのです。口を開けば肺に空気が入ってくるのと同じです。祈りの結果はこの主イエスにかかっているのです。③ 祈る人の熱意も、燃える思いも、祈る内容についての明確な理解も、祈りが聞かれる条件ではありません。祈りの結果は、こうした祈る人の力によらないのです。ただ主イエスの意志によるのです。

祈りは心の姿勢 ですから①祈りは言葉になる前に魂の中に生じるのです。主イエスに向かうわたしたちの心の有り様、主イエスに対して開かれた心の姿勢が祈りなのです。マルコ2章1-12節に登場する中風患者にむかって、主イエスは「子よ、あなたの罪は赦される」と宣言されます。その宣言に至る主イエスの動きを、その中風患者

は、目で追いかけていたことでしょう。ここでは祈りは眼差しになっています。祈りは、主イエスに向かう眼差しであり、心の姿勢なのです。

② 神は、天においてごこの眼差しや、心の姿勢に現れた魂の祈りを見逃されないのです。イザヤ65章24節はこう言います。

イザ 65:24 彼らが呼びかけるより先に、わたしは答え／まだ語りかけている間に、聞き届ける。

③ 言葉に出すかどうかは神にとって問題ではありません。それは私たちだけの問題なのです。

2. 神が祈りを聞かれる人の心の姿勢 1 ―無力さ

神が祈りを聞かれる人の心の姿勢には、2つのポイントあります。1つは「無力さ」であり、もう1つは「信仰」です。

祈りにおける無力さ 祈りは本質的に無力な人のためにのみ備えられています。① 無力な人だけ

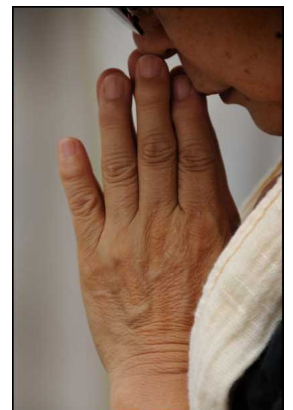


が本当に祈ることができるのです。祈りは無力な人のためにあります。自分の無力さに嘆く人、その人にこそ祈りは備えられているのです。その人の②心の底からのうめきは、言葉に出したあらゆる祈りにまさって神の心に届くのです。人が無力にとらえられたその瞬間から神は聞かれるのです。③わたしたちの無力さは、父なる神の心に届く唯一の、絶え間ない祈りです。幼子の泣き声を聞き逃さない母親のように、神はその人の祈りを聞き逃さないのです。幼子の泣き声が何を訴えているかを理解する母親と同じように、神はそのうめきを理解されるのです。

悩みの中で神を呼ぶ 人は悩みの中で神を呼びます。しかし神を呼びながらわたしたちの心は、神が聞いてくださるということに確信が持てないのです。神は、無力なわたしの祈りになど、聞いてくださらないと思うのです。①「神は聞いてくださらない。わたしが正しく祈らないので聞いてくださらないのだ。わたしの祈りは正しい祈りだろうか。それはただの言葉の羅列ではないだろうか。単なる空言ではないだろうか。祈りにもっと聖い誠実さと明確な意志

がなければ、神が聞いてくださる祈りにならないのではないだろうか。」わたしたちは、自分の祈りに自信を持とうと躍起になるのです。実は、そうではありません。無力さのどん底にいる人は、その無力さによって父なる神の優しい心に届く最高の祈りを持っているのです。悩みの中で真心から呼ぶとき、神はもう、最初から聞いておられたのです。② 無力さの中で主イエスに心の戸を開いた時、主イエスはすでにわたしたちの所に来ておられるのです。しかしそのときに与えられた祈りの答えを理解せずに、ずっと後になって理解することがしばしばあります。しかし主イエスは、その理解における無力さをも退けず、ともにおられるのです。わたしたちはむしろ、③ 無力さという贈り物をくださったことを神に感謝しなければなりません。それは神がわたしたちに与えてくださった最大の贈り物の一つなのです。

霊の低さ 神はわたしたちに無力さを教えるためにあえて、わたしたちの霊を「低くし」、



わたしたちの心を「打ち砕く」ことがあります。イザヤ書57章15節。
イザ 57:15 高く、あがめられて、永遠にいまし／その名を聖と唱えられる方がこう言われる。わたしは、高く、聖なる所に住み／打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり／へりくだる霊の人に命を得させ／打ち砕かれた心の人に命を得させる。

わたしたちが神について理解ができないとき、むしろその①神の不可解性は、わたしたちの自己満足とうぬぼれを打ち砕くのです。そしてわたしたちの信じる神が、わたしたちの理解を超えた神であることを知るとき、その神にいっさいを明け渡すことを学ぶのです。わたしたちの無力のゆえに理解しがたい神を信頼し、そこから得られる安心があるのです。ですから②祈りの霊がわたしたちの無力さを強く自覚させるたびに、祈りの炎は燃え上がるのです。③わたしたちの無力さがわたしたちを神と結びつ



けます。その依存感情は言葉では言い表せないほど強い有機的なものにまで育

ちます。

ヨハネによる福音書15章5節。

ヨハ15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。



3. 神が祈りを聞かれる人の心の姿勢2——信仰

無力さと信仰 神が祈りを聞かれる人の心の姿勢の第2のものは信仰です。無力さは信仰が結びついて祈りを生み出します。わたしたちは①正直に聖書の言葉に照らして自己反省するならば、自分の祈りには信仰が欠けていることが分かります。以下の聖書の言葉（マタイ21:21-22, マタイ8:13, ヤコブ1:6-8）に照らして、自分には信仰があると言えるでしょうか。

マタ21:21 イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。あなたがたも信仰を持ち、疑わないならば、いちじくの木に起こったようなことができるばかりでなく、この山に向かい、『立ち上がって、海に飛

び込め』と言っても、そのとおりになる。21:22 信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる。」

マタ8:13 そして、百人隊長に言われた。「帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように。」ちょうどそのとき、僕の病気はいやされた。

ヤコブ1:6 いささかも疑わず、信仰をもって願いなさい。疑う者は、風に吹かれて揺れ動く海の波に似ています。1:7 そういう人は、主から何かいただけると思ってはなりません。1:8 心が定まらず、生き方全体に安定を欠く人です

わたしたちは②祈りが応えられないのは、自分が信仰を持って祈っていないからで、神が自分の祈



りを拒否しておられるのだと考えがちです。しかしそれは誤解です。③ 実は、実際、わたしたちは自分で

考えている以上に信仰を持っているのです。実際、十分に信仰を持っているから祈るのです。

信仰のしるし 信仰のしるしは、その人がキリストのもとに来ること

にあらわれます。①信仰の、単純ながら明らかなしるしは、自分の悩みを知り、無力さを認めて主イエスの所に行き、どんなに事態が悪いかをあるがままに告げて、解決を主イエスの手に委ねることです。(ヨハネ6:37, 1ヨハネ1:9)

ヨハ 6:37 父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る。わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない。

一ヨハ1:9 自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます。

②主イエスの所に帰って行くとき、わたしたちはすでに十分な信仰を持っているのです。③悩みの時に、主イエスの所に行き、真心から信頼を持って主イエスに告げるとき、無力さは瞬間的に祈りに変わります。④主イエスは祈りを成就させるために、わたしたちの信仰という協力を必要としているのではありません。信仰とは主イエスと共に歩むことによって育つ信頼であり、神さまからの賜物です。主イエスは何の助けも必要としません。必要なのは、心の戸を開いて迎え入れることだけなのです。

4. 疑いと不信仰

しかしわたしたちの信仰には、時として、疑いが入り込みます。

不信仰と疑いは別 しかし不信仰と疑いはまったく別のものです。

①不信仰は意志の状態をいいます。つまり、信じないこと、自分の悩みを認めないこと、自分の無力さを受け入れないこと、主イエスの所に行こうとしないこと、素直に信頼感を持って自分の罪と悩みを打ち明けないこと、にあらわれます。②疑いは、信仰に対する試練、それに伴う苦悩なのです。しかし、すべての苦難や苦悩は、わたしたちに働いて益となります。

マルコ9章14-19節には、汚れた霊に取り憑かれた子どもを主



イエスのもとに連れてきて、主イエスに懇願するひとりの父親が登場します。彼は主イエスに「できるならば、自分の子どもを癒やしていただきたい」と懇願します。主イエスはそれに答えて「できれば、と言うのか」と切りかえされます。③それに対して父親は「信じます。信仰のないわたしをお赦しくださ

い」と自分の「不信仰」を認めます。この「不信仰」を悔いる父親に対して、彼の子どもを癒やした主イエスは、彼の一片の信仰を認めているのです。完全ではなくとも、父親には信仰があるのです。わたしたちは、度を超えて自分の不信仰を攻めることがあります。

完全な信仰は誰にもない しかし完全な信仰を持つことは誰にもできないのです。神によって①祈りが聞かれる理由は、祈りの最中や祈りの後でのわたしたちの確信や、感じ方や、考え方とは関係がないのです。たとえわたしたちが自分を〈不信仰〉と断罪したとしてもそうなのです。②わたしたちがまず自分の悩みを持って主イエスの所に行くとき、主イエスにすべてを委ねるとき、それだけで信仰は十分であることを知るべきです。③わたしたちは、自分を奮い立たせて信じる必要もありませんし、わたしたちの心から疑いを追い出そうと努める必要もありません。④わたしの信仰が弱くても、それを主イエスに告げさえすればよいのです。そのとき、わたしの悩みの中に、主イエスをお迎えすることができます。そして主イエスは、祈りを聞いて、答えてくださるのです。

祈りにおいて、第一にわたしたちに求められていること。それは、心を開いて主イエスを受け入れることなのです。祈りの霊が運ぶ新たな風を、胸いっぱい呼吸することなのです〔ギリシア語 πνεῦμα プネウマは「霊」とも「風」とも「息」とも訳す〕。

Ⅱ 黙示録3:20の言葉は、どのような教会に語られているか

ラオディキアとラオディキア教会

フルギアに属する小アジア西方の重要な町で、ミアンダー河（メア



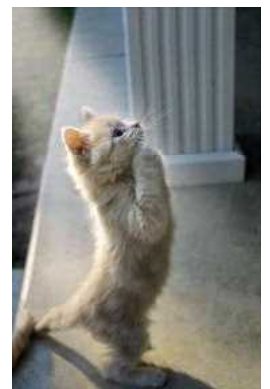
ルーカス河沿いのラオディキアの遺跡

ンデル川)の支流ルーカス河(リュコス川)沿いにあり、エフェソからシリアに通じる幹線道路やその他の道路が交わる交通の便が良い場所にありました。交通の便利さ故に、ローマ時代に商業、経済の発展に恵まれ、特に金融(銀行業)の中心地でした。産業は羊毛生産が盛んで、黒紫色の光沢のあるやわらかい羊毛がとれたといわれます。ラオディキアの経済的繁栄は、羊毛の生産と銀行取引による収入

によるところが大きかったのです。その経済力は、紀元60年の地震の際に、町が崩壊してその再建のために、皇帝の援助を断り自力で町を再建したことにも示されています。ラオディキアには有名な医学校があり、特に知られていたのは目薬で「フルギアの粉末」と油を調合して作られました。ラオディキアが経済的に恵まれていたために、人々はそのことを誇りとしていました。その精神は教会にも浸透しており、豊かさに満足し、自らの現実の無力な姿を認識しない微温的^{ぬるまゆ}な信仰に、厳しい神の言葉が突きつけられています。

しかし第一に彼らに求められていた悔い改めとは、黙示録3章20節が示すとおり、やはり、心を開いて主イエスを受け入れることだったのです。

2018.10.21 日本基督教団千歳丘教会



3:15 「わたしはあなたの行いを
知っている。あなたは、冷たくも
なく熱くもない。むしろ、冷たい
か熱いか、どちらかであってほし
い。

3:16 熱くも冷たくもなく、なま
ぬるいので、わたしはあなたを口
から吐き出そうとしている。

3:17 あなたは、『わたしは金持ち
だ。満ち足りている。何一つ必要
な物はない』と言っているが、自
分が惨めな者、哀れな者、貧しい
者、目の見えない者、裸の者であ
ることが分かっていない。

3:18 そこで、あなたに勧める。
裕福になるように、火で精錬され
た金をわたしから買うがよい。裸
の恥をさらさないように、身に着
ける白い衣を買い、また、見える
ようになるために、目に塗る薬を
買うがよい。

3:19 わたしは愛する者を皆、叱
ったり、鍛えたりする。だから、
熱心に努めよ。悔い改めよ。

3:20 見よ、わたしは戸口に立っ
て、たたいている。だれかわたし
の声を聞いて戸を開ける者があれ
ば、わたしは中に入ってその者と
共に食事をし、彼もまた、わたし
と共に食事をするであろう。

3:21 勝利を得る者を、わたしは
自分の座に共に座らせよう。わた
しが勝利を得て、わたしの父と共
にその玉座に着いたのと同じよう
に。

3:22 耳ある者は、“霊”が諸教会
に告げることを聞くがよい。』』

Rev 3:14 Καὶ τῷ ἀγγέλῳ τῆς ἐν
Λαοδικείᾳ ἐκκλησίας γράψον· Τάδε
λέγει ὁ ἄμην, ὁ μάρτυς ὁ πιστὸς καὶ
ἀληθινός, ἡ ἀρχὴ τῆς κτίσεως τοῦ θεοῦ·
Rev 3:15 οἶδά σου τὰ ἔργα ὅτι οὔτε
ψυχρὸς εἶ οὔτε ζεστός. ὀφείλον ψυχρὸς
ᾗς ἢ ζεστός.

Rev 3:16 οὕτως ὅτι χλιαρὸς εἶ καὶ
οὔτε ζεστός οὔτε ψυχρὸς, μέλλω σε
ἐμέσαι ἐκ τοῦ στόματός μου.

Rev 3:17 ὅτι λέγεις ὅτι πλούσιός
εἰμι καὶ πεπλούτηκα καὶ οὐδὲν χρειᾶν
ἔχω, καὶ οὐκ οἶδας ὅτι σὺ εἶ ὁ
ταλαίπωρος καὶ ἐλεεινὸς καὶ πτωχὸς
καὶ τυφλὸς καὶ γυμνός,

Rev 3:18 συμβουλεύω σοι ἀγοράσαι
παρ' ἐμοῦ χρυσίον πεπυρωμένον ἐκ
πυρὸς ἵνα πλουτήσης, καὶ ἱμάτια λευκὰ
ἵνα περιβάλη καὶ μὴ φανερωθῇ ἡ
αἰσχὺνὴ τῆς γυμνότητός σου, καὶ
κολλ[ο]ύριον ἐγχριῖσαι τοὺς ὀφθαλμούς
σου ἵνα βλέπης.

Rev 3:19 ἐγὼ ὅσους ἐὰν φιλῶ ἐλέγχω καὶ παιδεύω· ζήλευε οὖν καὶ μετανόησον.

Rev 3:20 Ἴδοὺ ἔστηκα ἐπὶ τὴν θύραν καὶ κρούω· ἐάν τις ἀκούσῃ τῆς φωνῆς μου καὶ ἀνοίξῃ τὴν θύραν, [καὶ] εἰσελεύσομαι πρὸς αὐτὸν καὶ δειπνήσω μετ' αὐτοῦ καὶ αὐτὸς μετ' ἐμοῦ.

Rev 3:21 Ὁ νικῶν δώσω αὐτῷ καθίσαι μετ' ἐμοῦ ἐν τῷ θρόνῳ μου, ὡς καὶ ἐγὼ ἐνίκησα καὶ ἐκάθισα μετὰ τοῦ πατρός μου ἐν τῷ θρόνῳ αὐτοῦ.

Rev 3:22 Ὁ ἔχων οὖς ἀκουσάτω τί τὸ πνεῦμα λέγει ταῖς ἐκκλησίαις.